

「思考・判断・表現」を見取る評価において、「十分満足できる」「おおむね満足できる」状況等を判断するに当たり、評価規準を基にしているのは、小学校、高等学校、特別支援学校が多い。判断するための基準を定めているのは、中学校では約半数であり、その他の校種においては、20～40%である（図4）。

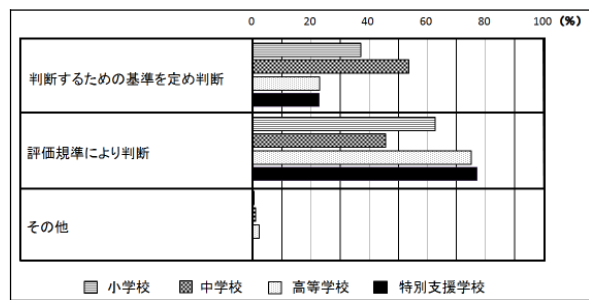


図4 「思考・判断・表現」の評価の判断

(3) 考察

以上の選択肢形式の調査集計結果及び各学校の評価等に関する自由記述から、課題及び研究の方向性を以下のようにまとめた。

「思考・判断・表現」の評価を難しいと感じている割合が高く、目標に到達したかを判断する基準が明確でないことから、評価規準に照らして、判断する基準を明らかにする必要がある。

言語活動の質的向上を図るために、評価規準に基づく基準を明確にし、指導の改善を図る必要がある。

第3章 「判断基準」の設定による評価の明確化と指導の充実

1 「思考・判断・表現」の評価

(1) 言語活動における評価の資料と評価の対象

基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力は、言語活動を通して育成される能力であることから、教科等の内容に即して思考・判断したことを表現させながら、評価規準に照らして評価することが重要である。

具体的には、単に文章、図や表に整理して記録するという表面的な活動の評価ではなく、自ら取り組む課題を多面的・多角的に考察しているか、観察、実験の分析・解釈を通して、規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しながら、教科等の学習内容等に即して思考・判断したことを記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動を通して評価することが必要である。表2は、児童生徒が思考・判断したことを表現する学習活動において、評価の資料としてよく取り上げられるものや評価の対象として考えられるものを、例としてまとめたものである。

表2 「思考・判断・表現」の評価の資料と対象の例

評価の資料(例)	評価の対象(例)
ノート、ワークシート	・ 学習場面に応じた課題の考察や思考の整理、効果的な表現形式等に関する記述など
自己評価	・ 言語活動における児童生徒の工夫や思考過程に関する記述(振り返りシート)
発表、実演	・ 口頭発表における発言(話し合い活動、ディベート、スピーチなど) ・ 面接での発言(インタビューテストなど)
作品	・ テーマに沿った文章(感想文、小論文、レポートなど) ・ 情報の整理、分析(図表、グラフなど)
記述式問題(評価問題)	・ 「事実」についての記述、「方法」についての記述、「理由」についての記述、「意見」についての記述 など

(2) 評価規準の設定による「思考・判断・表現」の評価

評価においては、評価規準を設定して児童生徒の状況を見取ることが示されている。評価規準は、設定した目標について、児童生徒がどのような学習状況として実現すればよいかを具体的に想定し、「おおむね満足できる」状況として示したものである。評価規準の設定は、一般的に、図5の手順で行われる。学習指導要領に示された教科等の目標、評価の観点及びその趣旨に照らして、身に付けさせたい事項の具体化、焦点化を図り、単元や学習活動に即した評価規準を設定する。この評価規準に照らして、「十分満足できる」状況をA、「おおむね満足できる」状況をB、「努力を要する」状況をCと判断する。

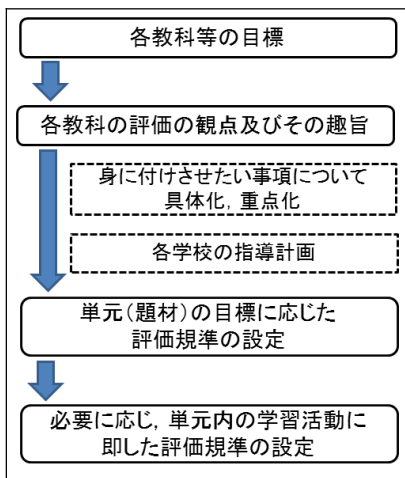


図5 評価規準設定の手順

「思考・判断・表現」の観点においても、児童生徒の思考・判断や表現の高まりを適切に評価するため、評価規準を設定する必要がある。しかし、思考や判断の状況は、量的な基準で測ることが難しく、評価規準を設定しても思考・判断の程度を捉えるには、その評価が曖昧になる場合も少なくない。

例えば、図6のような社会科の言語活動において、児童がワークシートに記述した内容を評価規準で見取る場合、評価規準に含まれる要素やその基準を明確にしておかなければ、曖昧な評価に陥る可能性がある。この論述において適切に評価をするためには、「基礎的・基本的な知識や概念について、どのようなことを取り上げていけばよいか」や「資料を根拠にした論述は、どのようにあるべきか」等の基準を、評価規準に基づき、いくつかのポイントを分析的に用意しておくことが大切である。

学習課題：「開国によって、日本の政治や人々の暮らしはどう変わっていったのだろう」(論述)

評価規準：我が国が欧米に追いつくために、政治制度の整備や社会制度の改革を実施するなどの近代化を進めたことや、文明開化によって人々の暮らしや考え方が大きく変化したことを適切に表現している。

言語活動
グループによるテーマ設定
資料活用による調べ学習
ジグソーグループでの説明
意見交流を基に論述

グループ内交流後の学習課題に対する自分の考え

開国後、坂本龍馬らのはたらきで幕府は政権を天皇にかえし、江戸幕府に代わって明治政府ができた。明治政府は、廃藩置縣、四民平等、富国強兵などのかいかくを行い、おう米に負けぬ強い国づくりを目指した。また、文明開化により、西洋の文化や考えが広がり、人々のくらしが大きく変わった。寺子屋を学校に代わった。国民の自由や政治に参加する権利を求め、自由民権運動の広がりによって、大日本帝國(もともなる資料) → 憲法がつくられたり、国会ができていった。このことは教科P98~105「自由民権運動が広がる」本頁から読みとりました。

図6 小学校第6学年(社会) 開国による影響に関する児童の考えの論述

同様に、教科等、校種を問わず、「思考・判断・表現」の観点の評価する際には、教科等の特性を踏まえて判断の基準を設定することが必要である。

(3) 「判断基準」の設定

本研究では、児童生徒の思考・判断の過程やその結果としての表現を質的、量的な面からよりよく評価するために「思考・判断・表現」の評価規準を基に、目標の達成の度合いを判断するための目安として「判断基準」を設定することとした。「判断基準」とは、評価規準で設定

された児童生徒の「思考・判断・表現」の学習状況を、より分析的に表した「判断の要素」を具体化した尺度である。この考え方に基づき、「思考・判断・表現」の評価における「判断基準」設定の手順を示したのが、図7である。

「判断の要素」の確定

評価規準に含まれる学習状況を分析し、「判断の要素」として端的に表す。例えば、児童生徒が考えたことを発表するという言語活動においては、評価規準に基づく「判断の要素」として、「発表内容」、「発表内容の構成」、「発表の方法」などが考えられる（図8）。

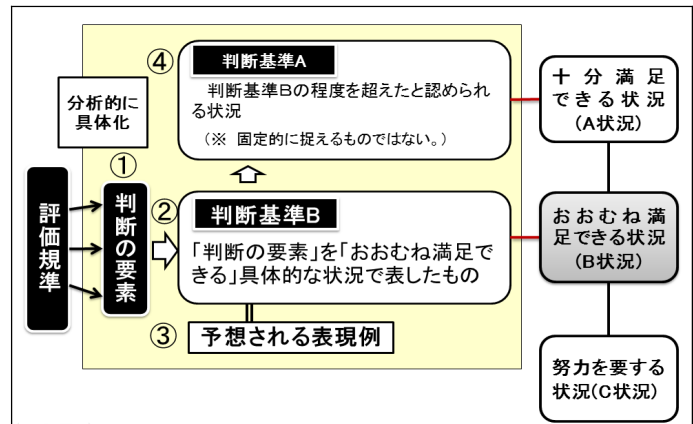


図7 「判断基準」の設定の手順

判断基準Bの設定

判断基準Bは、「判断の要素」を、「おおむね満足できる」児童生徒の具体的な状況で表したものである。前述で取り上げた言語活動の「判断の要素」に対応する判断基準Bは、児童生徒の「おおむね満足できる」状況から「テーマに基づいた視点の有無」、「意見、根拠や例示などの有無」、「グラフなどの情報提示の有無」等が考えられる（図8）。

予想される児童生徒の表現例の想定

判断基準Bの設定においては、児童生徒の実態と適合させるため、予想される児童生徒の表現例等も併記し、信頼性を高めることが必要である（図8）。

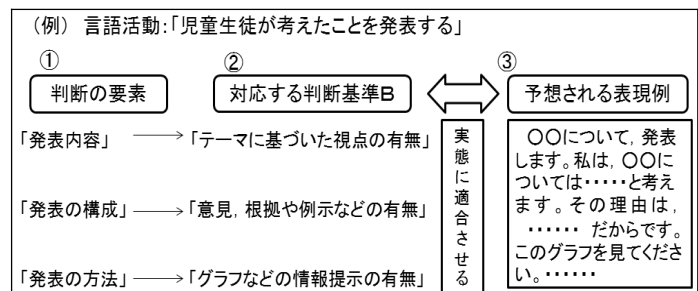


図8 判断基準Bの設定の考え方

判断基準Aの設定

判断基準Aは、判断基準Bに照らして、その程度を超えたと認められる状況を表したものである。教師が、児童生徒の目標達成状況を見て、更なる指導を行う場合の学習状況の程度及びその他、「おおむね満足できる」学習状況以上にあると認められるものを判断基準Aとする。「十分満足できる」児童生徒の姿は、多岐にわたることが想定されるため固定的には捉えず、児童生徒の学習状況をみて判断することも必要である。

図9は、中学校第3学年英語における書く活動の「判断基準」の例である。生徒が思考し、自分の考えを書いたものを評価する際は、評価規準に基づき「何を」、「どのような英文で」、「どの程度」書いてあるかを判断することになる。したがって、これらを「判断の要素」として分析し、

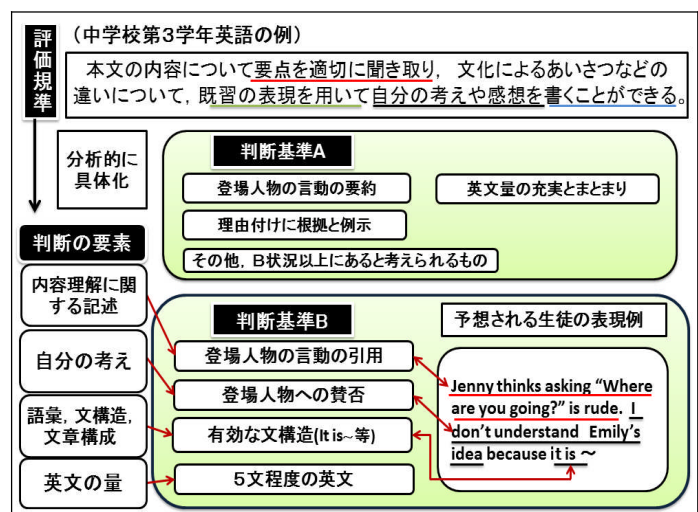


図9 外国語科英語における「判断基準」の例

判断基準Bとして具体的に表しておくことが適切な評価には必要なことである。生徒の作品や活動状況から判断基準Bの全てが満たされている場合に、「思考・判断・表現」の評価規準に示す「おおむね満足できる」状況に到達したと見取ることができる。

2 「判断基準」を生かした指導

「判断基準」は、「思考・判断・表現」の評価に活用することのみを目的とするのではなく、児童生徒に思考・判断したことを、表現させる指導を充実させるための重要なポイントとしても捉えることが大切である。教材研究時に、「判断基準」や「予想される表現例」をあらかじめ設定し、言語活動に至るまでの過程や児童生徒の具体的な言語活動の姿を想定することで、指導と評価の一体化を図ることができる。表3は、「判断基準」に基づいた指導と評価を整理したものである。判断基準Bを全て満たした状況が、評価規準に適合する学習状況であることから、児童生徒が判断基準Bを満たすよう働き掛けを行いながら、指導を行う必要がある。また、言語活動等における児童生徒の「思考・判断・表現」の評価結果を生かした補充・深化指導も重要である。

表3 「判断基準」に基づく指導と評価の例

「判断基準」に基づく指導	<p>教師の働き掛け</p> <ul style="list-style-type: none"> 知識・技能の確認，思考を促す学習課題の提示 思考・判断し，表現する言語活動の設定 表現させながら思考・判断させる工夫
「思考・判断・表現」の見取り	<p>児童生徒の姿による評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 判断基準Bの全て = 評価規準 評価の資料の収集（例） 児童生徒の記述（ワークシート等） テスト（筆記，実技），行動観察
補充・深化指導	<p>C状況の児童生徒に対して行う補充指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 「気付き」の促し <p>B状況の児童生徒に対して行う深化指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 「新たな視点」の提示

(1) 教科等の特性に基づく指導

判断基準Bを念頭に指導及び評価を進めていく上で、教科等や題材の特性に留意する必要がある。

例えば、国語では単元を貫く言語活動が重視されており、単元の終末に最も思考力・判断力・表現力が発揮される場合が多いことから、判断基準Bを基にして計画的・段階的に指導する必要がある。図10で示した指導の場合、予想される児童生徒の表現例は、単元の学習が集約された第7時を想定して表される。

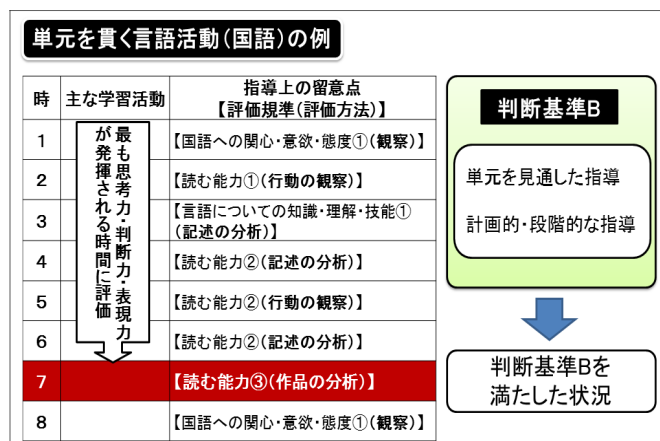


図10 国語における判断基準Bに基づく指導

一方、算数や数学では、「数学的な考え方」「数学的な見方や考え方」をどの場面でのどのように表現するのかを検討し、指導計画に位置付ける。そこで思考したことや数学的に表現したことを基に、その後の内容の深まりを確かなものにする。そうすれば、「技能」や「知識・理解」の定着とともに、数学的に思考・判断し、表現する力も相乗的に伸びていくと考えられる。

この場合、当該時間の指導や評価だけではなく、単元を通して児童生徒の伸びを見取っていくことも必要になる(図11)。

このように、思考・判断し、表現させる指導及び評価を行う場合、「判断基準」を念頭に置き、教科等や題材の特性を捉えて単元の指導計画に位置付けていく必要がある。

(2) 判断基準 B を念頭に置いた教師の働き掛け

思考力・判断力・表現力は、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な能力であることから、実際の言語活動の前提となる「課題を的確に把握できるか」「課題解決のために必要な知識や技能が身に付いているか」などを明確にした上で、適切に指導を行うことが必要である。判断基準 B は、それらの要素を適切な尺度として端的に述べたものである。したがって、各学習場面の指導の実際においては、判断基準 B をどのように満たすかという点で、教材研究を進め、教師の働き掛けを工夫する必要がある。例えば、児童生徒の思考を深める手立てとして、教具の工夫、ワークシートの工夫、話し合い活動の工夫等が考えられる。

例えば、数学において連立二元一次方程式について学習する場面において、図12のように判断基準 B を設定した場合、教師は、生徒が数量関係を効率的に考察できるよう、日常生活と関連した学習課題を基に、具体物を操作させたり、ワークシートに具体物を図式化し、方程式と比較させたりするなどして、思考しやすい活動に取り組ませている。

数学的な考え方の例 (小学校第4学年)					
時	主な学習活動	関心・意欲・態度	数学的な考え方	技能	知識・理解
1	4本の直線で四角形を作る。	進んで作ろうとする。			
2	仲間分け、理由付けをする。		基準になる性質を見付けることができる。	思考・判断、表現しながら、数学的な考え方に気づき、理解する時間	
3	台形について知る。			作図することができる。	
4					

判断基準B

これまでの学習、経験、数学的表現

↓

判断基準Bを満たした状況

↓

技能 知識・理解の定着

↓

「数学的な考え方」の更なる指導

図11 算数における判断基準 B に基づく指導

評価規準：連立二元一次方程式を解く過程を振り返り、加減法による求め方を分かりやすく説明することができる。


判断基準 B { 「図を使って、一方の図を消去することにより、解を求め、説明することができる。」(説明)
「立式して、一方の文字を消去することにより、解を求め、説明することができる。」(説明)

表現させながら思考・判断を促す教師の働き掛け

具体物による課題の把握

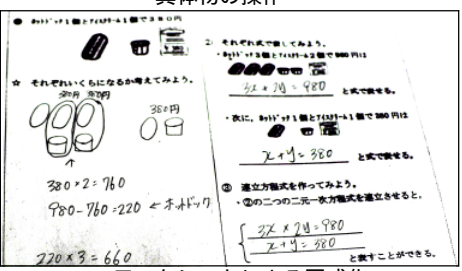
具体物の操作と方程式を使った解決の比較

解決方法を広げる話し合い



具体物の操作

ワークシートによる図式化



実際の生徒の説明

図を使って、一つずつだと380円となるから、二つずつにすると760円になる。これを式にあてはめて考えると、アイスクリームの値段を考えないで済むので、ホットドッグ1個の値段が220円だと分かった。(後略)

立式して、 x 円が3個で $3x$ 円。 y 円が2個で $2y$ 円だから、 $3x + 2y = 980$ になる。同じように、 x 円が1個で x 円。 y 円が1個で y 円だから、 $x + y = 380$ になる。二つの式から一方を消去することで、他方の解を求めることができる。(後略)

図12 中学校第2学年(数学) 連立二元一次方程式を解く過程を説明する活動

このように、判断基準 B を設定することで、児童生徒の思考・判断及び表現する活動において、ねらいに到達させる手立てを具体的に用意することができる。

(3) 「判断基準」による見取りと補充・深化指導

評価を指導に生かすには、児童生徒の学習状況を見取り、その状況に応じて必要な指導を加えていくことが大切である。特に、「努力を要する」と判断される児童生徒への補充指導が極めて大切である。すなわち、判断基準Bのそれぞれに照らした考え方や具体例を示し、児童生徒自らが、十分でない点に気付くよう指導を行う必要がある。この「気付き」を促す指導は、判断基準Bを満たすための手立てを用いて再度児童生徒に働き掛けたり、児童生徒の個別の達成度に応じて柔軟に行ったりすることが考えられる。

同時に、取り扱う題材や学習の状況により「おおむね満足できる」と判断される児童生徒への深化指導についても、判断基準Aとして、あらかじめ設定しておくことが大切である。授業における目標は達成していることから、課題解決の多様な方法に気付かせたり、思考・判断の質的な深まりが進むよう「新たな視点」を提示することなどが考えられる。その際、児童生徒の発言、論述及び作品等から「新たな視点」を導き出し提示することも有効な指導法である。

図13は、高等学校化学において、水溶液中の銅()イオンの量的な変化について着目させ、硫酸銅()水溶液の濃度変化について考えさせる学習活動である。実験結果から、硫酸銅()水溶液中の粒子の挙動を図示させ、判断基準Bを満たしていない生徒には補充指導を、満たしている生徒には深化指導を行っている。

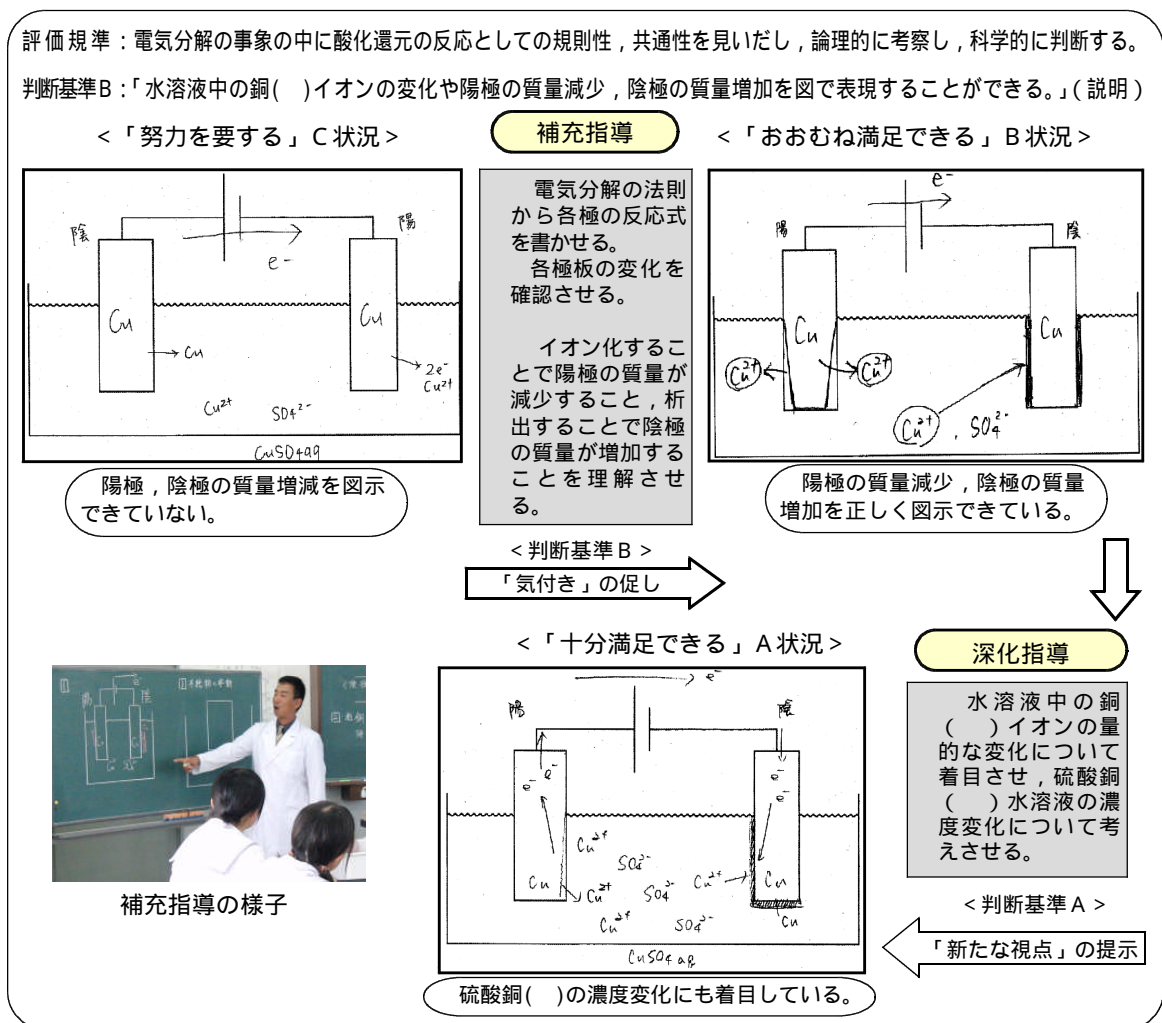


図13 高等学校第2学年(化学) 硫酸銅()水溶液中の粒子の挙動の図示

このように、評価規準Bを満たしている場合、あるいは満たしていない場合の「気付き」や「新たな視点」を準備しておくことで、評価結果を生かした効率的な指導が可能となる。